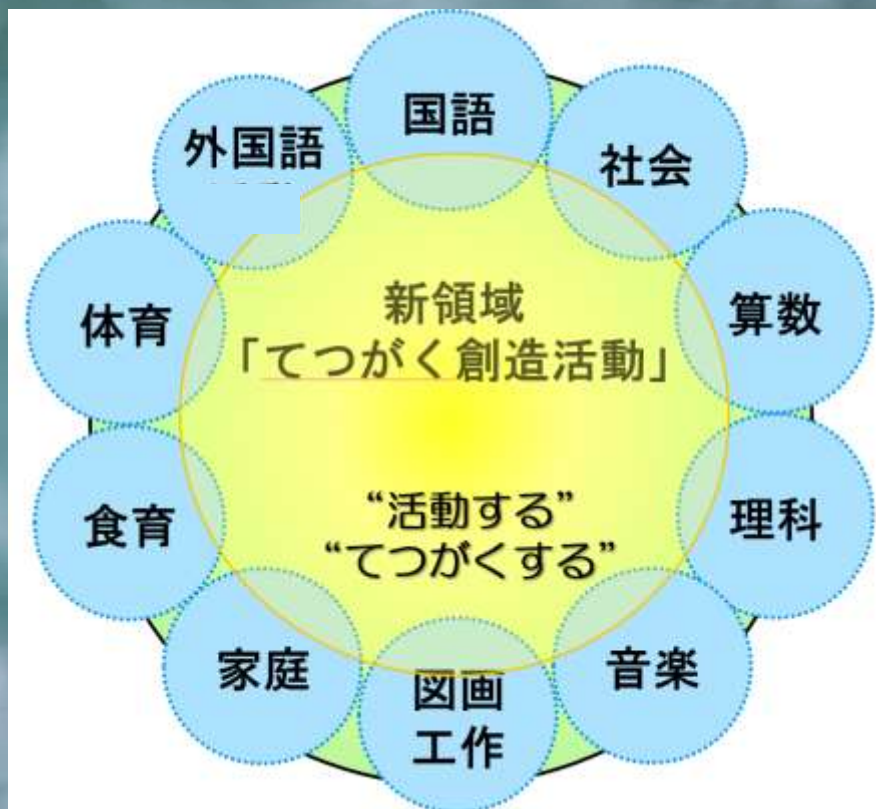


新領域「⁺てづがく創造活動」を中核とした
“学びをあむ”カリキュラムの実践
～お茶の水女子大学附属小学校
2023年度 研究開発成果報告から～

お茶の水女子大学附属小学校
長濱和代⁺

力をつけた個の育成と カリキュラム・オーバー ロード(内容の過積載)

→教科以外の教育活
動を、自由に組み替
えていいとしたら？



自由かつ自律的な
環境で、ひと・もの・
ことに働きかけ、共同
体を変化させていく
“活動する” こと

身近な出来事に問いを
立て、自明と思われる
価値や事柄 について探
究する
“てつがくする” こと

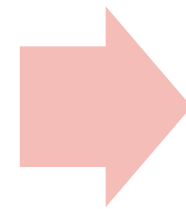
“学びをあむ”カリキュラムを目指して

- ・ **変化の急激なこれからの社会を生きていく子どもたちは、自分たちを取り巻く世界や課題と向き合う中で、場面や文脈に即して知識や多様なスキル、態度及び価値観などを統合させながら活用する資質・能力（コンピテンシー）を発揮しながら、一人ひとりが幸せを感じることができる社会をつくる市民として、それぞれの共同体に関わっていく。**

Q:「アクティブ・シティズン(積極的に自立し社会参加する有能な人)という概念

Q: 全員が同じように習得せねばならない力! ?

秩序の再生産につながる「社会化」
政治的行為主体につながる「主体化」
主体化は「民主主義を実践することで
しか学ぶことができない」



他者との関わりを基盤に、経験
や慣習をあみ直していく市民と
して成長していくため、新領域
「てつがく創造活動」を中核に
おき、メタ認知スキル・社会情
意的スキル等を育む

新領域「てつがく創造活動」

子どもの興味・関心

専心活動・反省的思考・リゾーム型の学び。他者との関係性の中で、知識・技能を**反省的に活用する**営み。

“活動する”こと

経験を重ね
他者にひらく

経験

具体的な経験を
する。成功や失敗に
自分で気づく。

対話をもとにふ
り返る

振り返り

経験を多様な観点
からふりかえる。学
習者自身がエピ
ソードを抽出する。

対話を通し
て“てつがく
する”

実践

新しい場面でマイ
セオリーを試してみ
る。

概念化

エピソードを検討し
て、マイセオリーを
紡ぎ出す。

準備する
実践する

発見し、
見直しをもつ

多面的思考・自己の在り方への意識・共同体での探究。複数性によって**意味や価値を捉え直す**営み。

“てつがくする”こと



カリキュラム上の運用(3年生以上)

	月	火	水	木	金
5 (40分)					てつがく創造活動
6 (60分)	てつがく創造活動		てつがく創造活動		てつがく創造活動

総合的な学習の時間(70)・特別活動(35)・道徳(35)および学年に応じて各教科時数を調整し、年間175時間超をあてる

1,2年生「みがく」の時間

「てつがく創造活動」につながる学びとして、サークル対話や計画表にもとづく学習、プロジェクト型の学びを行う

現在の 成果と課題

4つの問題意識

- ① 自由な活動の学習指導要領案をどう示すか
- ② “学びをあむ”子どもを育てる教師の在り方
- ③ 子どもたちの学びの具体を共有し、その意味を紡ぐ
- ④ 子どもたち自身のことばであまれていく実践へ

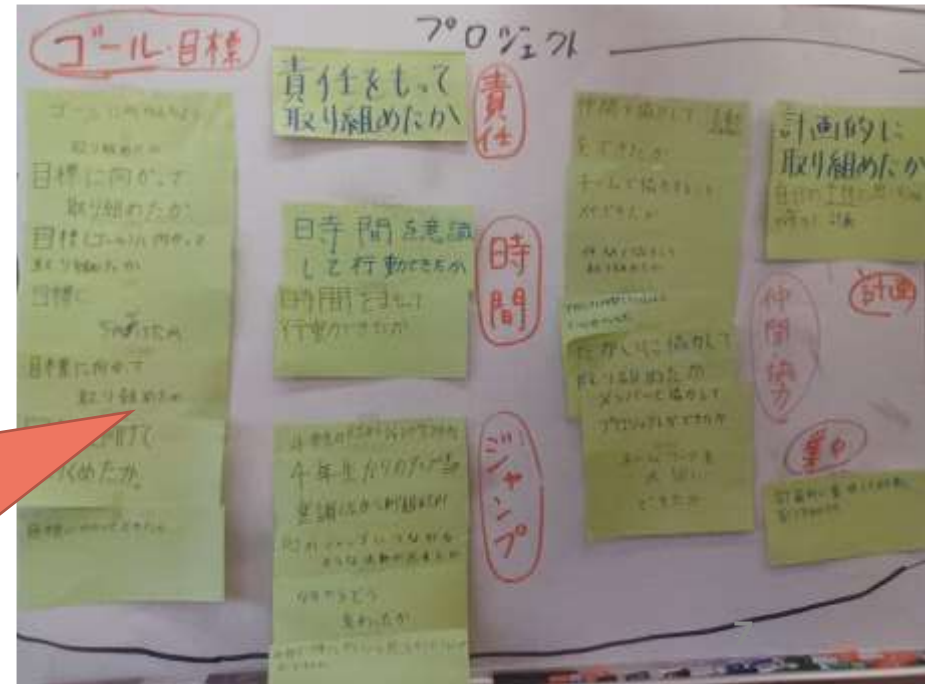
プロジェクトについて視点を決めて振り返りを書きまわろう。

視点	振り返り
自分の意見を相手に伝えたいかどうかが	ただ心の中で「私は〇〇がいいと思う」という考えをくり返していたら、頭の中ではステキな対話でも現実にはもの悲しい対話になる →周りの子も話しづらい →だから、自分の意見をハッキリ!
圧が強くないか	思いっきり自分ルールを他人におしつけるのはNG →一言でいってキラワレ! →翔子が言っている圧は→おしつけるたと思う
時間を守って行動できたか	→ランクトンプロジェクトでよく外で活動してるから、時間を忘れることが多い。でも、授業時間を忘れてランクトンを一心にしている子が1人いても他のメンバー(3人)が気づいて「おーい!プロジェクト時間、あと5分〜!」といえは「あ、ますい、ますい、教室もどって、このアオミドロみよー!」となる。 →ある意味メンバーたちの「きずな」が深まる(?)
4年生からUPしてきたか	4年生の時と同じプロジェクトをやっているわけではないので、ちょっとどうやってくらべるのか →「からんか」視点はいいかんじがもしれない。 →「ま思いついたものだけと、見つけたプロジェクトのフィールドをかけは」よりよく、自分たちもわかるし、伝える相手もわかる。つまり1石2鳥!ということ。 →ミジコなどモソゾはたーくさんあると思うから、プロジェクト豆ちしき、という題名でのせようかと考え始めました! まとめは4年からUPした!

通知表の代わりに自身の評価を

- ①今学期の活動における振り返りの視点を、てつがく対話をもとにクラスで作成する
- ②視点の中から自分の活動に当てはまるものを選択して記述する
- ③ページの上限は設けず、自分にとって意味があると考えた観点で記述する

ふり返りの視点をそれぞれの声から概念化

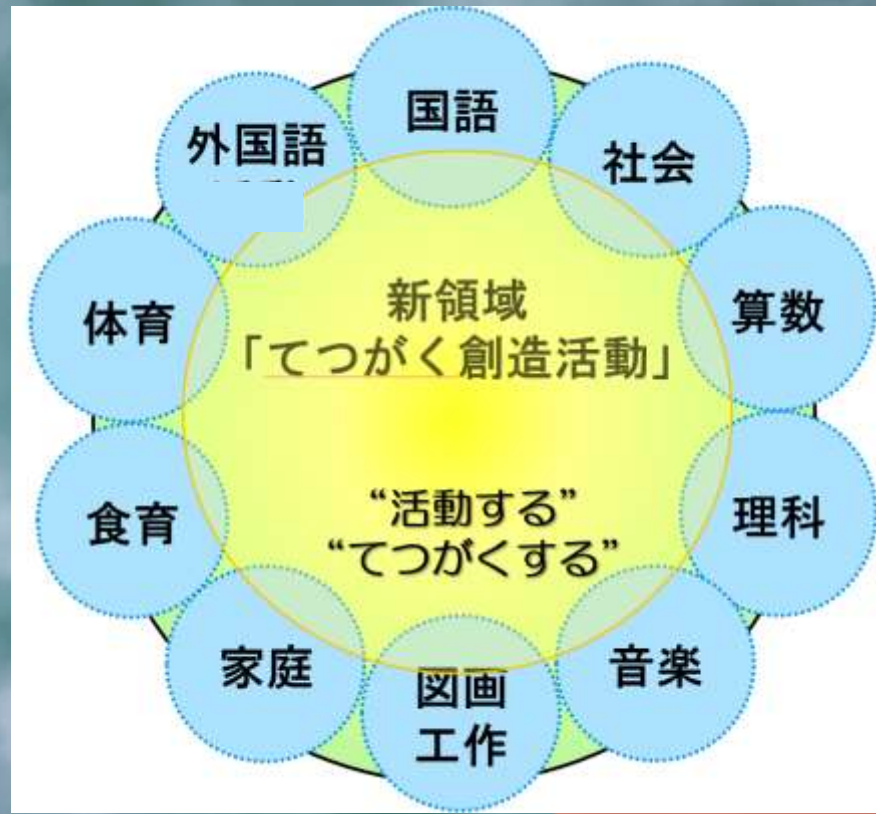


学びとしての評価を「関係としての評価」へ

評価活動	実践者	他者の声	児童の必要感
ICT記録	教師○ 児童△	共同編集 個人選択	○ △
実践記録シート	教師	事例検討	—
計画表	児童	教師のコメント	△
ポスター	児童	PJで共同 掲示+付箋	◎※児童 発案
学期の 振り返り	児童	視点の話し 合い・保護者 コメント	○
てつがく エッセイ	児童	文集編集 教材利用	国語 ○

- ・活動に内在する“よさと問い”の内実を学習者自身が意識することで、教師・学習者双方の**学びへの鑑識眼を鍛えていく**自己評価。
- ・子どもたち自身が経験をふり返って言語化していくことは、**個の活動としては完結しない**。
- ・他者の取り組みを見聞きしながら、活動をふり返ったり次の進め方への刺激を受けたりすることは、学びのプロセスを向上させるだけでなく、**学びへの持続的な関わりを促すことや関係のプロセスを豊かにすることにもつながる**。
- ・他者評価と自己評価とが関連し、子どもたちの活動の中に**自然な形でモデレーションが発生する**には。

教科以外の教育活動を「力をつける」時間ではなく、存在と価値を「確かめ合う」時間に



→教科以外の教育活動を自由に組み替えていいとしたら、子どもたちにどんな時間の使い方を提案しますか？

自由かつ自律的な環境で、ひと・もの・ことに働きかけ、共同体を変化させていく
“活動する” こと

身近な出来事に問いを立て、自明と思われる価値や事柄について探究する
“てつがくする” こと

実践者としてのミッション

- 飼い慣らされない主体性を育てる
- プロジェクト学習のアップデート
- パークス・アイヒマン・パラドクスを越えて
- エージェンシー概念の提起→変革主体としての生徒
- コンピテンシー・ベース：学校を能力形成の場として捉える
- エージェンシー・ベース：学校が関係性の中で発揮される場
- ムリス「脱植民地化された子ども」子どものエージェンシーの発現を阻害しているのはマジョリティ
- 主体があって関係が生まれるのではなく、関係があって主体が生まれる
- 子どもの声を可視化させる（市民性という）舞台装置としてのカリキュラム
- カリキュラムの中で能力育成の時間も必要だが、そうでない時間も必要
- 飼い慣らされない研究開発学校としての発表を